

あるなら、これは古代における木材の用材観を根底から変えることを余儀なくする。私自身、関東地方や石川県、宮城県などの中世頃の仏像をこれまで何体か拝見したことがあるが、そのいずれもがカヤであった。これを私は都（畿内地方）ではヒノキを使うが、地方ではカヤを使うのかと考えていた。能城らの結果が常識の変更を意味するのなら、その考えも成り立たなくなる。

小原の同定結果にはその証拠となるものはどこにも示されていないのが大部分である。そして同定に用いたプレパラートなどが保存されているかどうかは不明である。木材に限らず植物や動物を同定する場合、誤同定をする可能性は常に存在する。また、その時点で利用可能であった情報では同定しきれなかったものもある。その様な可能性に対する保証として同定に用いた標本を証拠標本として保存することは必須のことであることを筆者はこれまで強く主張してきた(鈴木, 1996)。今回のこの結果は、過去の同定結果がそれを保証する証拠にアクセスすることが出来ないものはきわめて資料価値が低いものであることを改めて示したといえる。それにしても、小原が調べた 600 もの仏像、出来るなら再度きちんと調

べて確かな証拠を保存するとともに、古代の木彫仏の正しい用材観を是非とも得たいものである。

それにしても「京都神護寺の薬師如来像は、ヒノキの一木造りで、貞観期の一番古い作品の一つである」(小原, 1972, p. 72) と言う文章を一体どう読んだらいいのだろう。途方に暮れるばかりである。

引用文献

- 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之. 1998. 日本古代における木彫像の樹種と用材観. MUSEUM (東京国立博物館研究誌), 555 : 3-53.
- 小原二郎. 1963. 日本彫刻用材調査資料. 美術研究, 229: 74-83.
- 小原二郎. 1972. 木の文化. P. 217. SD 選書 67. 鹿島出版会.
- 鈴木三男. 1996. 遺跡出土木材の樹種同定結果をどう整理・保管し、データベースとしていくか. 植生史研究, 4 : 65-69.

(鈴木三男)

書評(新刊紹介): 小林達雄編著. 1999. 最新縄文学の世界. 256pp. 朝日新聞社, 東京. 本体 1700 円.

近年の縄文時代の遺跡の発掘調査から分かってきた新しい事実はあまりにも多い。これからも分かってくる事実はあまりにも多いと予測される。山内清男以降の縄文時代・文化のとらえ方の現時点での総括を、平易に概説しようとしたのが本書である。そしてまた、縄文時代研究の代表的研究者である編著者小林達雄とその一門(厳密には私のように無関係な者も随分いるが)の縄文学の集成を紹介しようとの目論見もあるように見える。

本書は、第1章縄文文化研究の動向と展望、第2章縄文スペクトラム—どこまでわかったか、第3章縄文キーワード—縄文文化を読み解く手引き、からなる。第1章は小林達雄である。本書の題目、最新縄文学の意図がそこからは読み取れない。本書は本当に小林達雄編著なのか、それとも題目だけを目立たせようとしたのか。要するにこれは研究小史に過ぎない。第2章は16のトピックスから成り立っている。私も1項目—生態系を攪乱させて有用植物を選択した知恵、を書いている。

第3章は、縄文時代・文化に関係する用語解説である。海藻・海草が取り上げられたのは興味深い。海進・海退

はあるが、縄文海進がない。縄文海進がしっかり解説されていないのは、大きな片手落ちである。環境考古学を、考古学の一分野というより遺跡を媒介とした人類史と自然史の複合領域だといえる、とするのは一歩も二歩も前進か。植物考古学を、縄文時代の植物質製品や植物遺体を対象とする研究領域、植物考古学の登場で道具や施設の実態に迫る研究の道が開かれ、縄文時代研究は痕跡学から実態学へと転換する契機を得たとし、追跡調査には伝統的な考古学の枠組みを超えた新装備や専門スタッフも必要になり、考古学の組織改編を促しつつある、とする。年代測定法はあまりにも簡単で実態がこれでは分からない。放射性炭素法は独立に取り上げなければならないほどである。全体として質・量のバランスがよくないのは、短期編集のせいであろうか。

とは言え、本書は平易な語り口で普及を図るのが目的である。縄文時代・文化を知らずして環境のみを語るなど、もう遠いむかしのこと。考古学のある実態を知るにも本書は良い。

(辻 誠一郎)